



国 際 ・ 業 際 ・ 学 際

取 締 役 田 代 圓
科学計測事業部長

初めから私事で恐縮だが、私は約20年間にわたり、いわゆる「海外事業」に携わって来た。「海外事業」をそのまま英語に訳すと“Overseas Operations”という事になる筈であるが、私は“Overseas Operations”と呼ぶ事を避けて、“International Operations”と呼ぶ事にして、従って、当社の「海外事業部」の英語名は、“International Operations Division”という事になっている。

外国における事業展開を「海外」事業と認識するのは、島国である日本の特異性から来るものでもあろうが、国内の仕事は国内事業、外国での仕事は海外事業と、二つの別の物と切り離しているためであろう。本来、事業の展開に国境はなく、国内と国外の関係は、内と外との隔離・対立的な概念ではなく、国と国とを結ぶ、調和的な国際的な関係として把らえるべきであると考え。“Inter-national”とはまさしく、国境を超えて、国 (National) 相互間のかかわり合い (Inter-) を意味している。いささかくどくなつたが、いわゆる海外事業は、本来的には、国際事業——世界事業——として把らえるべきであると言うのが、私が冒頭に述べた主張の背景である。

ところで、最近「業際」という言葉が日常的に使われるようになって来ている。化学会社が、電子、金属、医薬、食品等々の異分野へ進出することは、もはや、ファッションと呼べる状況になって来ているし、この現象は何も化学業界に特有なことではない。需要サイドの要求も、極めて多様化して、従来の特産業の範疇では対応出来なくなっている。このような動きの中で、各産業分野間のかかわり合いが論じられるようになって来て、「業際研究会」などというものが開催されたりするようになって来た。

学問の分野も同じで、一つの現象を、多様な観点に立って、総合的に解析することは、学問の進歩とともに、極めて通常に行われていることである。いわゆる「学際」的なアプローチである。「境界領域」といった言葉もよく使われているが、そもそも、物理学、化学、生物学といった古典的な学問の分類——境界分け——は、甚だ人為的、恣意的なものであつて、ある現象を何れか単独の学問分野の領域内でのみ解明しようとするのは、無理な事であろう。「学際的」なアプローチの必然的な背景である。

ところで、一方、学問の進歩に伴い、その分野はますます専門的に細分化されて行く傾向にある。最先端分野を、極めて高度なレベルで追求して行くとなると、いきおい狭い分野に集中することが必要になって来るのは避け難いことであろう。

・専門分野細分化の動きの中で、研究者にもまた国際化、業際化、学際化への対応が迫られているが、チャレンジングな事だと言えよう。